

資料渉猟余話

その80

「明治卅二年八月登前、明治末年の富士山
富岳帰途於名古屋」の登山の風俗が伺えて、
裏書がある1枚の写真 それだけでも楽しい。

(MSC所蔵)があ …が、しかし、この
る。富士山登山の帰 写真、それ以外にも意
途、名古屋の写真館で 外な背景を背負って
撮ったものらしい。名 する。

古屋城を配したバック この頃の飯田下伊那
が如何にも写真館の背 の年表を手繰ってみる
景である。よくみると と、この年8月、飯田
欄外には「南外堀町」 下伊那を中心とした実
の文字も読み取れる。 行教徒が、久我建通を
金剛杖に脚絆草鞋履 会頭、黒田清綱を副会
き、菰だらうか寒さや 頭に、飯田町の風越館
雨避けの笠を背負って で「大日本実行会」の
いる。100年余も 発会式を開いている。

江戸時代以来の不二教 中で、下伊那の信徒た
(実行教)の、有力な ちは、江戸時代以来の
地域であった下伊那の 不二教の信仰的迷信的
実行教徒たちの実質的 な部分の改革を訴えて
な不二教からの独立で いたが、受け入れられ
あった。 ず、便宜上体裁上、本
明治初年の大教宣希 部は東京においていた

大日本実行会の発会式 次世代の息吹

嶋 不濁

政策で神道を含め宗教 が、ついには独立とな
組織による徳育(「教 つたのである。
育勅語の浸透)を自論 もともと国学の門徒
んでいた政府が、学校 であった多くの下伊那
制度の普及等に伴い、 の会員は、すなわち
神道をその手段にする 「実行会」として、既
ことを諦め、政教分離 成神道から脱し、教育
の色合いを強めていく 勅語を掲げ、その道徳

実践団体としての色彩 行会の発会
を強めていく。報徳社 式に出席し
との関わりも興味深 た黒田、佐
い。 伯の帰途
その独立の式典が、 を、近藤政
明治32年8月なのであ 寛、木下倭
る。 志雄、北原

栗谷真寿美氏が下伊 阿智之助の
那教育会の市村文庫の 3人で送
市村威人野帖ファイル り、その後
から拾い出した「近藤 富士へ登山
政寛氏談」を書き留め したという
ている。 ことであろう(「大日

「発会式ノトキ、近 本実行会の成立(74頁)
藤、木下ウシオ、北原 と書いている。黒田は
阿チノ助氏ハ佐伯有義 副会頭になった黒田清
トヲ送りテ天龍川ヲ下 綱(正三位子爵)、佐伯
リ、長篠へ出テソレヨ は佐伯有義(正七位)
リ三人シテ富士登山」 である。
これを受けて栗谷氏 さて、この写真だ
は「飯田で開かれた実 が、まさにその登山の



明治時代の富士山登山の様子がうかがえる



*好評発売中！
嶋不濁著『黄眠先
生が行く 日夏
歌之介残影』
(南信州新聞社刊)

時のものだ。写真裏に
は北原阿智之助の手
で、胡座が近藤、椅子
着座が木下、立位が北
原であることが書かれ
ている。下伊那の次代
を背負って立った3人
の若き日の姿である。